

氏名	工 藤 展 也
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	博乙第 1947 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和 63 年 9 月 30 日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者（学位規則第 5 条第 2 項該当）
学 位 論 文 題 目	若年者における腰部椎間板障害 —とくに、腰部椎体後方辺縁分離の成因についての臨床的および形態学的研究—
論 文 審 査 委 員	教授 折田薫三 教授 寺本 滋 教授 村上宅郎

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

腰部椎間板ヘルニアの病因は、一般に加齢変化の一つとされているが、直接の病因は現在でも不明である。若年者の腰部椎間板ヘルニアの中には、稀ではあるが、椎体後方の ring apophysis が離開する腰部椎体後方辺縁分離（以下後方辺縁分離と略す）をとるものがある。

本研究は、18才以下の腰部椎間板ヘルニア35手術例と後方辺縁分離14手術例を臨床的に比較検討した。さらに後方辺縁分離の術中摘出骨片を組織学的に検索し、その病因について考察した。

両者とも臨床的には大差がないが、いずれも発症誘因の点では、成人例に比べ外傷の既往が多い。ことに後方辺縁分離では外傷の関与が大きい。

また、後方辺縁分離の椎間板造影、術中所見、および摘出骨片の組織像などより、椎体の ring apophysis 下の軟骨部は力学的抵抗減弱部と考えられる。したがって後方辺縁分離は、急激かつ異常な外力が働いて椎体縁の離断をきたし、椎間板組織が ring apophysis の付着部で埋入した腰部椎間板ヘルニアの特異な一型であると考えられる。

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

若年ヘルニアの中、特に後方辺縁分離の研究は、少い。本研究者は18才以下の腰部椎間板ヘルニア35手術例と後方辺縁分離14手術例を臨床的に、後者では摘出骨片の組織学的検索をも行っている。後者では神経根刺激症状が主徴であること、若年者では椎体の ring apophysis 下の軟骨部が力学的に減弱部であることなどを明らかにし、後方辺縁分離は10才代でこの減弱部に強い外力が加わって起る腰部椎間板ヘルニアの一亜型であ

ることを見い出している。誠に貴重にして重要な成果であり，医学博士の学位に足る好論文である。